

冊を上海に留め、其の餘の原稿二十冊を送附せらる。余之を閲覽するに略ぼ論次を定め、廣汎に亘る漢洋書冊の要領を摘記し、之に君の意見を挿入しあり。思ふに中西交通史を編まんとするものに似たり。天若し君に年を假さば蓋し不朽の名著を大成せしならん。而かも余の不才今之を如何ともする能はざるは惜みても猶ほ餘りあるべし。聞く上海に留めし稿本は己に行く所を知らずと云ふ。君の不幸何ぞ夫れ此に至るや。是に於て同志と相謀り、遺文を蒐集し之を粹に上せ以て追慕の忱を表し、併せて此の益を世に願たんと欲す。友人宇治田直義氏は嘗て君に業を受け、今尙斯道を研鑽して倦まず。自ら奮つて其の事に當り、普く君の寄稿せし新聞雑誌を搜羅し之を収録し、校訂して遂に此の書を成せり。本書は固より君が造語の一端を窺ふに過ぎずと雖も、復た以て聊か同志の意に副ふことを得ば幸甚なり矣。余君と舊交あるを以て本書の成るに臨み、其の由來を序せざるを得ざる也。

昭和四年三月二十二日

根 岸 信 誠

支那之實相目次

題 字	近 衛 公 爵
序 文	根 岸 信 誠
支那は何處へ行く	一
支那治安に關する一考察	三
支那政争と社會運動	五
支那内亂の已まざる所以は何れにありや	六
支那開港以前の各國關係	四
清代の日支外交關係	三三
露支最近の外交關係	一四
露支蒙三國の外交關係	一七
支那無線電信布設問題に關する外交關係	一五

支那關稅制度の歴史觀……………三三
 支那古來の關稅と現行關稅……………三三
 支那借款に就きての感想……………三五
 支那内國公債の研究……………三九
 貿易上より觀たる日支關係……………三六
 在支外人設立學校概觀……………三六
 江蘇省の教育概觀……………三九
 江南三角洲の史的考察……………三九
 中華民國の國歌に就いて……………四一
 歴史より見たる西湖……………四三
 江南の秋景論……………四四
 漢史を讀んで韓信と吳佩孚とを想ふ……………四二

(以 上)

支那之實相



前東亞同文書院 教授文學士 大村欣一 著

支那は何處へ行く

—

支那の國土たる西は天山之を限り群巒委蛇として地勢極まる所歐洲を連ぬ、北は蒙古之を劃し漠沙曠々として雄洲列する所北辰高く懸る、誠に其國土の大なる人民の多き彼の如く、其歴史の長く其將來の測り易からざる彼の如き國なれば、研究方面の多數にして材料の豊富なるは贅言を要せず、若し世界の問題が現時の如く此國に集中するなしとするも、其研究の重要なるは甚だ明なり、近時支那に關する内外人の著述説論其數に乏しからず、觀察の精、研讀の密を以て稱せらるゝ者少しとせず、然れども支那研究が容易ならず其眞狀が知り易からずとせらるゝは、一に支那文物なる者の非統一的にして秩序を缺き、文に普通の則なきに非ずと雖も、實に紛糾錯亂收拾すべからざるの狀あるに因し、

支那は何處へ行く

—

若し其の未だ嘗て整齊の美を成さざる千百固々の現象を彙集すとも、何等支那に對し價値ある智識たらざるや論なく、夫の汗牛充棟も嘗ならざる古今の文獻を以て直に支那政治なりとし、徒に儀容を粉飾し一毫の眞なき文物を以て直に支那文明なりとせば甚しき誤謬に陥るべく、要するに支那人事の研究は其表面的現象の千態萬狀に誤らるゝなく、人民の性情能力を洞察するに在り、而して此の識見を定むるを支那に對する常識とも稱すべく、此常識を基礎として紛雜極なく表裏相反する現象を解決せば過なさに庶幾からんか。

二

我邦は支那と國土相近く人種相似、其の古典其の歴史夙に傳來し文物思想を繼承せしこと少からず且つ同文の故を以て、支那古今の載籍を比較的に讀解し易く之に基き國狀を推考するの便多し、故に歐米人に比し支那を了解するの利甚だ大に、従つて支那の眞研究は先づ我邦人により世界に紹介せられざるべからざるなり、然れども此の歴史的彼我の接近は驕て我邦人の支那を説く者をして、動もすれば主觀に偏せしむるの弊あり、我邦の人種が支那と相似たるとも必ずしも其性情思想相似たりとすべからず、彼我の文明に於て其淵源の同じき者なきに非ずとするも、必ずしも其精神氣魄を同じくすと斷すべからず、歴史に遺る支那文明と我邦に入り全く神髓を新にせる學術思想とを以て、現時の支

那を解かんとするは誠に誤りなり、我邦人が支那を主觀的に觀察し之を古典的に、之を文學的に美化するの傾向は歐米人に比し、時に比較的深遠なる考究をなし機微を穿つの長所なきに非ずと雖も、往々事實の觀察を誤り現代支那の實情を公正に解く能はざらしむるの短あるを免れず、之に反し歐米人は支那の傳説古典と密接なる關係を有せず、支那人を客觀するの地位を有し其判斷に偏頗の弊少し、されど其風俗思想の隔絶甚しき爲め時に識見淺薄皮相の難あり、是れ歐米人が支那國土に關する研讀多きに比し其人民に關する者少く、また之あるも往々我邦人を満足せしむるに足らざる所以なり。

凡そ限ある人の知を以て限なき世事を知らんとする殆ど、各其好む所に偏するも亦人の常情なり、故に誰か濫に是非を彼此の間に辯じ得る者ぞ、されど支那に對し主觀的見界を立つる容易なる我邦人は、更に進んで客觀的研究方面を開拓し、其眞想を不偏不黨に觀察するを豈重要ならずとせんや、實に支那人の性情能力の特質は我邦と果して同一なるものなりや、否やを深く考ふるを支那研究の第一義とすべきなり、英人と印度人とは其均しくアリアン人と稱するに於て同種族なり、然れども此二者の間に無限の差あるを何人も否定するなし、同じく蒙古人と云ひ亞細亞人と稱するとも其間にまた無窮の異途に存するありやなしや。

三

支那文明は其起源遠くして且つ大に世界最古の文明たるに於ては埃及、印度、波斯、希臘等に比し寧ろ優れりとすとも劣れりと謂ふべからず、然れども其文明一たび或る程度に達してより永く轉化の跡を絶ち常に一定形式の上に留り、離々たる黍稷の裡、寂寞たる墳墓の上に座し未だ嘗て動かざるを感ぜずんばならず、其國家組織の如き、其法制典禮の如き、其文章言語の如き、其文學技藝の如き、其經濟殖産の如き、是皆有史以來一定形式の上に彷徨する幾千年なる者に非ずや、人は云ふ支那文明の進化せざるは其の外部關係に因る、今や歐亞文明將に混一せんとす、支那文明の發達期して待つべしと、予以爲らく然らず、文明の進歩は一に國民性情能力に關す、支那文明が個々文的の發達を爲して毫も全體的統一的傾向を示さざるは、誠に其國民に缺如する所大なる者存すればなり、凡そ事物は單より復に進み復より統一に歸す、而して支那は單より僅に復に入り而も遂に統一に至る能はざる能力を有し、性情を備ふる者に非ざるなきか。

山は故國を圍り周遭として在り潮は空城を打つて寂寞として廻る、誠に文明を色に譬ふれば歐米は褐色の文明にして支那は是れ暗黄色か、將た黑色か、陰鬱の氣人に逼り萬象誠に活力に乏し、黴黒光なき幾多の城壁と黒風白雨幾百年の孤塔とは支那文明の標章に非ざるなきか、之を其江山に見其人物に見、建築道路に見、其生活状態に見る、一として皆然らざるなく而して其文物は古さが故に陰暗なるに非ず、懷古の情を伴ふが故に寂寥たるに非ず、其由來する所實に統一秩序の根底を備へざるに在

り。

世人支那の社會に秩序なく、政治に法度なきは其地勢、地利、歴史、教育等に關係すとすも、是等の諸因が之を馴致するに大なる力ありしとも考ふる能はず、實に此民あつて後此の政治、此の社會歴史、教育を生ぜし者、非統一、非秩序の現状はまさに此の國民に最も適合したる程度ならずんばあらざる也、斯く説かば是れ其因を轉じて果とし、果を以て因とし其間に完全なる説明を缺くの弊なきに非ざるが如きも予はたゞ斯く信ぜざるを得ざるなり。

四

有史以來天下の統一は支那歷世王者の企畫せし所、治國平天下は學者の理想なり、而して時に春秋戰國と云ひ三國十六國と稱し、南北朝五代と名づくる如き群國分立或は南北分争の時代も短からずと雖も、三代が帝業の鬚範を垂ると傳へらるゝ如き、漢、唐、元、明、清の如き、天下一統の名を有する時代も亦甚だ長し、されど支那人の所謂統一とは如何なる状態を指せるかを詳察すれば未だ嘗て統一國家の成就せられしを見ざるなり。

禹が九州を開き各州の貢賦を定め五服の制を立て、より幾千年、遂に此の貢賦制度を改むるなく、其本國とも見るべき王畿は大率六七萬方哩猫額大の範圍を出でず、其の地方は封建と稱し郡縣と云ふ

も要するに貢賦を以て中央の藩屬地たるのみ、而して歴世の爲政者は其屬地の貢賦を王畿に收めて中央の形式的裝飾を美にし全盛を誇り王政を稱し、時あつて土木を起し時あつて外征の武を揚げ以て天下一統、四海一君を謳歌せしめたり、然れども貢賦収入の多き時代は長かる能はず、中央財政の收支相當の期誠に短く地方が甘んじて中央に貢獻を致せしは歴朝の間幾何もなく、創業者は數十年の勞を盡し其武は暫く地方を控制するとも大率二三世にして、威令地に墜ち唯其の隋力は僅に王朝の名を保つのみ。

夫の周禮は王畿の制度を記すに止まり、唐の六典明清の會典も亦た中央官府の形式を定むるのみ、歴世の間未だ政治的に中央が地方を統一せんと策せし者を見ず、封建郡縣の名は異るとも、其實皆是れ地方の分立なり割據なり、僅に毎年中央に貢賦を致すと否とはやがて統一と分争の名を生ずるなり、固より其國土の大にして大陸に位し交通の利便を缺く甚しきに由り、政治的、國家的の統一を爲すを得ざるとの理由なきに非ずと雖も、其の狭小なる王畿の政治に見、比較的範圍の大ならざる地方州縣に見て何等整齊秩序ある政治を確立し能はざりしを察すれば、國土の大なるのみが必ずしも支那政治を非統一ならしむる者と謂ふべからず、若し支那人にして秩序を尙び整頓を思ふの民なりしならんには一封侯の下、一州縣の下、必ずや見るべき政法を立て民生の治安を策すべきなり、之を地方に見る官と云ひ吏たる者徴税の外職とする所幾何ぞ、千山兀として綠樹盡き四百州氓として蒼生食飽かず、

肉食の徒は其富少からざれども一簞の食、一瓢の飲、陋巷に窮死する者二億を以て數ふべきか、また三億を以てすべきか、各種方面より考察して支那の人口は數千年來増減なく、今も猶遂に繁殖を絶つを深く注意せざるべからず、之を中央に見る、創業の際には整然たる官制官規の明文を定め治國愛民の仁政を稱するも其實を窺へば唯文武百官の榮は其政治なり、王侯世爵の富は其の精華なり、狭小見るに足らざる王畿に在りても幾分の政治らしき政治を布けるなし、傳へて云ふ上古井田の法を行ひ民其生を樂み、唐は班田の制を布き民其業に安んぜり、禮儀三百威儀三千郁々として文なる哉と、支那は文章の國なり、所謂視て具文と爲すの民なり、予は深く其他を云ふを欲せざるなり。

五

支那地勢を概見すれば蒙古、新疆、西藏の高原帶與其他の平原帶とに分れ、平原帶は黃、揚、粵、三流域に區分すべし、孔子曰く金革を衽にし死すとも厭はず之れ北方の強、寬柔を以て教へ無道に報ぜざる南方の強なりと、言辭美に過ぐるもまた以て其高原平原二民族の氣質相同じからざるを示す、其高原は北緯四十度以北に在り寒氣酷烈にして風俗勁剛、瀚海蕩々として草木稀に、雨量極少にして河川ありと雖も殆ど名のみ、此間に住する民族が遊牧を以て生業とし、朔風肥馬に鞭ち千里胡沙を蹴り慄悍にして粗野なるは自然の然らしむる所なり、而して此の高原の邊麓漸く東南に低く其地勢に従つて

下れば黄河の農耕地に出づ。實に天然の形勢に據りて勁勇なる北方民族が南下して黄河流域に國を立て進んで南方を壓したるは故なきに非ざる也。

上古王者の都せし所始め山西に在り堯舜禹の如き尋で河南に下り(夏の相王より殷の紂王に至る)周は陝甘に於て西戎に覇となり東向紂を討し、秦も亦西戎に力を養ひ六國を併合せる如く、其王者は皆北或は西の高原に根據し之を率ゐて黄河に至りしなり、春秋戰國の際には齊の山東に、燕の直隸に、吳越の江浙に、楚の揚子江に在りしが如く四方に群國を生じ就中楚最も強大と稱せられしも、遂に秦に敵する能はず、秦漢の間屢北方の強を征し長城を以て内外を分ち、北地新勢力の新に南下せんとするを禦さしも、晋に至り五胡中原に入り十六國を建て尋で南北朝となり、南朝江南に據りしも黄河流域は悉く北方新興の民族に蹂躪せられたり、而して上代より幾王朝皆是れ北民族の新陳代謝して黄河に入りし者、五胡も其國を建つるに至りては敢て之を外族とも云ふべからず、隋は陝西より、唐は甘肅より、宋は直隸より出で交々相代りて王と稱せり、實に隋唐宋の如きも亦北民族の間の新勢力にして、若し南北合一の業をなす能はざりせばまた胡と稱せらるべき者の如し、而して其外族が中原に入るや始めは互に畛域を分つも久しくて游牧民の農耕地に移りし者なれば、其文物の高低より悉く黄河流域文明を學ばざるを得ず、斯くて數十年外族も何等異れる民族たらざるなり。

周、秦、漢、隋、宋の如き北人につき中原に入り永く外族たるを標榜し、自族の保全に勉めたるを

遼、金、夏、元、清、とす、遼は東蒙に起り金之に次ぎ夏は甘肅に據り元は外蒙に出で、清は北滿に立てり、前代の王者は其父祖永く邊疆に在り西戎に在り覇たりと稱せらるゝ如く、熟北民族なりしも遼金以下は皆高原に在りし生北民族なりしかば其外族たることを著しく明にせり、要するに所謂漢人なる者も北人の相踵ぎ南下し南方民族と混合せし者にして、黄揚平原の一治一亂は必ず北人の新に下るにより生じ、政治上に於て新來の民族常に武を以て勝り、南人にして國を建て北方と拮抗せし者三千年間幾何もなく南に都せし南朝數世、吳、越、楚、明の如き殆ど言ふに足らざるなり、實に其北方文明は古典的にして簡易質實に南方文明は經濟的にして稍調節ある色彩を帯び、北は梁粟黍稷の民にして南は稻茶蠶絹の民なり、朔風戎衣を卷き大雪弓刀に滿つとは北なり、孤帆遠影碧空に盡き夜半鐘聲客船に到るとは南なり、北地全年平均温度は六度乃至十二度にして南は十五度乃至二十二度、全年降水量は北に於て僅に四五百耗、南に於て一千乃至二千耗なり、南北人の永く相分争し南人の常に敗れし所以も自ら此等自然と關係する少からざる如し。

支那史上三千年殆ど南北分争を以て政權推移の骨子となせしと雖も今や時勢は既に業に急轉せり、區々たる南北蝸牛角上の紛難は支那大局を解決するには餘りに力なき也。

共和政が支那に適合するや否やは支那治安の問題に非ず、堯舜禪讓の傳説は支那現時の共和政と何等の關係がある。されど今帝政に復すともまた其の安危は之と終始することなし、清室滅亡の原因は種々ありと雖も其内に存する者比較的になく且つ微弱にして、寧ろ世界の趨勢が此國をして永く無事に置かしめざる運命に由る、其事制は清を滅せるに非ず、其立憲も亦清を覆せるに非ず、若し支那をして世界と常に隔絶せしめ得たらんには永へに事なく、其最も民性に適合せる舊政を繼承して足りよしや歴史に見るが如き革命ありとするも政本遂に改むるの必要なきなり、然れども今や支那は其最も適合せる政治を棄つべきの期に會し、而も新に採らんとする如何なる政治も容易に此國民に融合するなし、我邦の維新は國力の淵源を究めて其成れる所以を察すべく、支那の革命は其内より之を成すの力誠に微弱にして、外部より已むを得ざらしめし者に由る。

若し支那にして眞に興國の力あらしめば豈今に至つて始めて革命を唱ふる者か、開港以來茫乎たりし星霜こゝに幾十年ぞ、清廟堂の頑迷説くべからざりしは偶革命を遅らかしめしと云ふは當らず、國民賢にして廟堂獨り愚なりしとは支那實狀に於て之を言ふ能はず、革新政治の遅かりしは廟堂の罪に非ず、國民の罪に非ず、唯革新なる者の支那に適合する能はざるのみ。

其開港以來七十年、屢々列國と難を醸し殊に日清の役及び匪亂は清室滅亡の運を致さしめたり、而して其一難去り一戰戢まるや毎に革新の唱へらるゝあり、終に立憲となり中央集權となり、一轉して

革命となり共和となれり、支那革新の唱へらるゝ一朝一夕の故に非ず固より今に至る數十年を經過せり、然れども此の數十年を經過せる今の革命も亦是れ名の變のみ、國力の實質に於て幾何の異をか生ぜず、支那の治安は共和に待つ能はず、將た帝政に期す能はず、たゞ之を其國民に望むべく、而して國民は今一亂長く收拾すべからず、而して東亞盛衰の運一に繫つて此國に在る也。

歷世革命に際し統合の容易ならざりしは之を史に見るべく、春秋戰國の間分争凡そ五百年、漢末黃巾の亂より晋に至る凡そ九十六年、南北對立凡そ一百六十八年、五代の分立凡そ四十七年、南宋此地を棄て、より元に至る一百〇七年、元末明初の紛亂三十五年、明末清初の擾亂四十五年なりき、而して今や時勢また昔の如からず、内は交通面目を改め外は列國環視すれば争亂比較的に速に平定すべしと考へ得べきも其實決して然る能はず、若し内に權勢の争奪稍收まれば必ずや外列國と無窮の難を生ずべく、其財力、兵力を考察し其政治を概見せば誠に慄然として畏るべき者あるなり。

七

支那人民及び社會に關する研究は現今内外人の孜々考察を怠らざる所、殊に其政治經濟の現狀は最も世人の知らんと欲する所従ひて之が研讀甚だ多しとす、然れども支那人事の研究は其價值消極的なり、若し現狀を探查して遺漏なく、真相を洞察して通曉せざるなきに至るとも之を以て積極的智識た

らしむるには缺く所なしとすべからず、之を補ふには必ずや其土地生産に關する科學的研究を以てすべきなり、若し三億支那人は世界の文明に貢獻する力甚だ微弱なりと斷ぜらるゝ時期至らんとも、四百萬方哩天悠地曠の國土が有する價値は百世に無盡なり、支那は天府の富を藏すと稱せらるゝ所以も其人民の現状が富めりとの義に非ず、之を包有する大陸の不滅を示す者に非ずや。

實に支那土地の科學的研究は支那智識の根底にして東亞百年の大計を樹立すべき基礎なれども、其價値の重大なると共に研究の容易ならざるあり、彼の名あるリヒトホーヘン氏の北支那地質礦物古生物に關する著の如き、其他支那海關を始め幾多學者の研究の如き、有益なる智識を世人に示すなきに非ざれども猶九牛の一毛たるに過ぎず、支那大産物たる米の研究如何、蠶絲、棉花、茶の研究如何、各種礦産の如き、一般農工業の如き、氣候地味の如き、天然と生産との關係の如き、生産と人民との關係の如き、皆猶科學的研究の至れる者あるを見ず。

近時滿洲に於ける研究漸く端緒を開くや世人は愕然として其富を説き、其産を論じ噴々賞賛して措かずと雖も、而も支那本部一百萬方哩の江山大野が包有する眞の價値は果して如何、何人も未だ之を問ふに至らず、支那將來の商工業は悉く其基礎を土地生産の科學的研究に置がざるべからず、吾人は之を未來に期し之を我邦人に望む眞に深き者あるなり。 (支那政治地理講序)

支那治安に關する一考察

一

古來支那に於て王朝を争ふ者は必ずや北方黃河の大原に據りて南支那を制御す、而して此の北方の王朝に平かならず、之と拮抗せんとする者は常に揚子江の大流域に蟠まつて、北人と輸贏を決するを見る、斯くして其南方に據る者大率最終の勝利を占むる能はず、亡國の恨は南人に絶へず落目慘として古城を照らし、王者は北地に在りて支那併合の業を成す。

清末の革命より以來年を重ねる十年、此間に在り屢其人を代へ屢其黨を改め、屢其勢を變ぜしと雖も、南北の分争はまさに歴史に遺る跡を反覆するのみと思はるゝなり、其第一次革命の起れる原因は種々あるが如しと云ふも、之を要するに、北方政府に嫌らざる者が名を共和に藉り事を擧げしこと明かに、而して其の革命派は南方武昌、漢口、南京、上海一帶に根據し、北方と争ひ、清王室を覆へし、北人政府を壞りは壞りしと雖も、直に北人に制壓せられたり。若し其勢に乗じて疾風迅雷北方の大原に入り支那、共和政治を確立し、全支那の革新を思ふがまゝに成し得たらんには、南北の分争は比較的速に解決せること明なり、然れども南方の勢力は、遂に此の大業を遂行するに足らず、是に於てか、